

# ゴータマの言葉とイエスの言葉の比較について

松岡由香子

—

仏教とキリスト教を比較する場合、ゴータマ<sup>①</sup>の言葉とイエスの言葉を比較するのは、どちらもその宗教の創始者であるから、きわめて妥当な方法のように見える。しかし、ことはそう簡単ではない。

第一に、おのおのの宗教において、両人の言葉の持つ意味はまったく異なるからである。キリスト教ではイエスの言葉は最重要であるが、仏教ではゴータマ・ブツダの言葉は重視されないか、まったく無視されている。

キリスト教においては、イエス抜きにはキリスト教はあり得ず、その言行が書かれている福音書なしにはありえない。パウロは「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる

者には神の力です」(一コリント一・一八)ともいい、イエスの言葉の聴取、応答がキリスト教信仰を成立させる<sup>②</sup>といえる。また新約聖書の中でも福音書はカトリックや聖公会では礼拝の中で拝読の前後に聖詠を入れて他の文書とは異なった扱いをしている。また聖書は、すべてのキリスト教の教派のみならず、現代の三大異端においても、たとえ訳は違っても根本に据えられている。

イエスの言葉の重要性は、イエス自身が次のように語る言葉から明らかである。

(一) 「種を蒔く人は、神の言葉を蒔くのである……良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて受け入れる人たちであり、ある者は三十倍、ある者は六十倍、ある者は百倍の実を結ぶ」(マルコ四・一四・二〇、共

観<sup>3</sup>。

(二) 「神に背いたこの罪深い時代に、わたしとわたしの言葉を恥じる者は、人の子もまた、父の栄光に輝いて聖なる天使たちと共に来るときに、その者を恥じる」(マルコ八・三八、共観。)

(三) 「天地は滅びるがわたしの言葉は決して滅びない」(マルコ一三・三一、マタイ。)

(四) 「そして御国のこの福音はあらゆる民への証として、全世界に宣べ伝えられる」(マタイ二四・一四)。

特にヨハネはイエスが神の言葉(ロゴス)であるという独特の神学を持っているため、編集者によるイエスの説教や編集句の中でもしばしば「言葉」の重要性を言う。

(五) 「言は肉となつてわたしたちの間に宿られた」(ヨハネ一・一四)。

(六) 「イエスは言われた。『帰りなさい。あなたの息子は生きる』。その人はイエスの言われた言葉を信じて帰って行った」(ヨハネ四・五〇)。

(七) 「はっきり言っておく。わたしの言葉を守る

なら、その人は決して死ぬことがない」(ヨハネ八・五一)。

(八) 「わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがある。わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く」(ヨハネ一二・四八)。

(九) 「わたしを愛する者はわたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む。わたしを愛さない者は、わたしの言葉を守らない」(ヨハネ一四・二三)。

(一〇) 「わたしはあなたから受けた言葉を彼らに伝え、彼らはそれを受け入れて……わたしはかれらに御言葉を伝えましたが、世は彼らを憎みました」(ヨハネ一七・八・一四)。

このことは、キリスト教が墮落ないし逸脱した時、その宗教改革運動において「聖書に帰れ」ということが改革派の大きな主張となり、礼拝は聖書解釈(説教)が中心に据えられた。また前世紀後半のキリスト教改革運動も「イエスに帰れ」ということをスローガンの一つにした。

一方、ゴータマの言葉（原始経典）は、上座部（南方仏教）では用いられるが、大乘仏教ではほとんど用いられず、日本では新宗教以外、律宗を除くどの宗派（眞言宗、天台宗、禅宗、日蓮宗、浄土宗、浄土真宗など）も用いていない。

ゴータマ・ブツダの言葉の軽視は、仏教の最初の改革運動において、ゴータマの言葉に帰るのは反対のベクトルである新しい経典の創出という運動となったことでも証される。

その大乘仏典も一応は「如是我聞、世尊一時」などという形式を取り、ゴータマ・ブツダの言葉だと信じられてはきた。だが、その大乘仏教の改革運動ともいべき禅宗では、大乘経典の言葉にはなんの権威もない。臨済は「三乗十二分教も皆な是れ不浄を拭うの故紙なり」（『臨済録』示衆一〇）と言い、ブツダは「四十九年一字不説」とも伝える。

また、大乘経典はゴータマの言葉だから権威や信用があったわけではない。たとえば浄土教では、ゴータマ・ブツダの言葉ではなく、阿彌陀仏となる法蔵菩薩の言

葉、「誓願」を信じるのである。

第二に、第一と密接に関係するが、仏教とキリスト教では、「聖典」の概念規定自体が非常に異なっている。仏教の聖典は諸覚者（ブツダたち）の言葉であり、したがって、そのつど覚者とみなされた人の言葉を収集した仏教文書の全体であり、基本的に付加増広という編集が貫かれている。さらに、経典だけではなく、戒律もなくてはならない聖典であり、後には論も聖典とされ、セイロン上座部では紀元前八〇年代頃までにパリー語で記述され、五部（経）、律、七論<sup>4</sup>が正典となつて限定される。だが、大乘仏教では続々と創作されたサンスクリット語やあるいは諸国の言語による経典、論書を含み、日本の著述も入れられて増え続けている。キリスト教では、イエスの言葉だけではキリスト教は成立しにくく、せいぜいユダヤ教の一分派のような形態にしかならないし、語録伝承だけでは、グノーシスのような異端グループも発生させえる。ゆえにパウロの書簡によるイエスの意味付けが必要なので、それらは早くから重視された。その神学が、モーセ五書す

なわちイスラエルの歴史と律法を核とするユダヤ教の救済とは異なるということを断言しているため、キリスト教がユダヤ教を離れて成立したと言える。だが、異端者マルキオン（一四〇年代）による聖書（ルカとパウロ書簡の独自の改訂版、旧約聖書を入れない）の制定もきつかけとなり、エイレナイオス（一八〇年頃）などが正典（カノン）。何もつけ加えたり、削ったりしてはならない」という概念を用い、著者が（形式的であれ）使徒である書簡と福音書で聖典を定めた。ムラトリ断片（二世紀末か三世紀始め）と呼ばれるものには、四福音書、使徒行伝、パウロの一三書簡、第一第二ヨハネ書簡、ユダ書簡、ヨハネ黙示録が挙げられている。二七文書が新約正典とされたのは、三六七年のアタナシウスによってである。

以上のように仏教とキリスト教では「聖典」の概念が異なる。

第三に、これがかつとも大事な点であるが、キリスト教では、言葉は救済（真理？）を伝達しうる媒介であるが、仏教では、その核心は言葉によっては伝達し

がたく、自ら行ずることによって目覚めた者（ブツダ）となって成就するものである。

キリスト教については第一のところで述べた。

仏教においては、その核心が言葉で伝えられないことを一期経典（八詩句の章、スッタニパータ四章）<sup>⑤</sup>でみてみたい。

（一）「かれら（真のバラモン筆者）ははからいをなすことなく（何物かを）特に重んずることもなく、『これこそ究極の清らかなことだ』と語ることもない」（七九四）。

（二）「かれらは諸々の教義のいずれかをも受け入れることもない（八〇三）。

（三）「師（ゴータマ筆者）は答えた、マーガンデイヤよ。『わたくしはこのことを説く』ということが、わたくしにはない」（八三七）。

（四）「或る人々が最高の教えだと称するものを、他の人々は下劣なものであると称する。これらのうちで、どれが真実の説であるのか？かれらはすべて自分らこそ真理に達した者であると称しているのであるが。」

(九〇三)「(真の)バラモンは、他人に導かれるということがない」(九〇七)。

それでもゴータマ・ブッダは教えを説いたし、それが伝承されていないか、との反論もあろう。たしかにそうであるが、その説いた内実とは何か。

第一にどのように修行するかという行のあり方である。

(五)「サーリプッタよ。世を厭い、人なき所に座臥し、さとりを欲する人が楽しむ境地、および法(ダンマ)にしたがって実践する次第を、わたくしの知り究めたところによって、そなたに説き示そう。しっかりと気をつけ分限を守る修行者は、五種の恐怖におじけてはならない。すなわち襲いかかる虻と蚊と爬虫類と四足獣と人間(盗賊)などに触れることである」(九六三、九六四)。

蚊や動物や悪人を恐れるな、というような遊行の日常的注意が、はるばる道を問いにやってきた智慧第一のサーリプッタに説かれているのである。

また、どのように老死を乗り越えるかという道が説

かれる。

『彼岸への道』(一期、スッタニパータ五章)は、「今、眼のあたりに体得されるこの理法を、私はそなたに説き明かすであろう。その理法を知って、よく気をつけて行い、世間の執着を乗り越えよ」(一〇五四)というように、老死を超える道が説かれているのであり、そして「ドータカよ。わたくしは世間におけるいかなる疑惑者をも解脱させ得ないであろう」(二〇六四)といわれるように、ゴータマ・ブッダの言葉を聞くことによってではなく、修行者自ら行ずることによってしか、解脱を得ることができない。

そしてもう一つ、ゴータマ・ブッダが教えを説いた根本的理由がある。当時の他宗教との違いを闡明するためである。そしてこの点がイエスの教えと際立って異なる点である。

イエスはガリラヤ地方を拠点として活動し、もっとも遠いところで地中海沿いの町ティルスやシドン行つたのみである。そのことからユダヤ教寄りの編集をする『マタイ』は、イエスに「異邦人の道に行つてはな

らない。またサマリア人の町へ入ってはならない。むしろイスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい」(二〇・五、六)といわせている。したがってその当時は、周辺世界に多様な宗教が存在していたにもかかわらず、イエスが相手にした宗教者は、祭司、律法学者、レビ人、ファリサイ派、サドカイ派すべてユダヤ教徒なのである。しかもイエスは旧約聖書を批判したことはないし、自らユダヤ教徒であることを否定したことはない。

いっぽう、ゴータマ・ブッダが活動した範囲はガンジス川の流域を中心にマガダ国、ヴァツジ国、カーシ国、コーサラ国、クル国、アヴァンティ国、ヴァツチャ国など東北インド全域に及び広大である。しかも当時はバラモン教のウパニシャッド諸学派だけではなく、ジャイナ教のニガンタ・ナータプッタ(マハーヴィーラ)、サーリプッタとモツガーナ兄弟がかつて師事していたサンジャヤを含む六師外道をはじめとして、さまざまな自由宗教者(沙門)の運動があり、いずれも苦、解脱、涅槃を説き、坐禅などの行もなされ

ていたから、それらとゴータマ・ブッダの道の違いを明確にすることは非常に大きなことであった。

それゆえ、その教学といわれるものの多くは、バラモン教をはじめとする異教との違いを説明するためのものである。

## 二

以上のように聖典の概念が両教ではまったく異なり、またその中におけるイエスの言葉の意義とゴータマ・ブッダのそれは極めて異なり、両教の「聖典」をもつてしては、比較の基準たりえない。では具体的にどのように比較の基準を決めたいのか。

### 1 資料の基準

第一に比較の資料を決定しなければならない。その基準は歴史的確実性である。

イエス・キリストとゴータマ・ブッダがパレスチナや東北インドに実在して、その言葉、活動が大きな影響を及ぼしたことは歴史的事実である。しかし、ゴ-

タマとイエスはどちらも書いたものを残さなかった。彼らに関する資料はすべて伝聞である。

キリスト教にとってイエス・キリストの歴史性は非常に大きな問題であるから、正典化の基準もイエスと直弟子（パウロを含め）の言葉となった。パウロは彼自身が書いたと認められる書簡が少なくとも六書<sup>7)</sup>ある。イエスの言行は四福音書に記されるが、『マルコ』と、Q資料<sup>8)</sup>のイエスの言葉は、その源をイエス自身に遡らせることができる。それに『ヨハネ』の中の伝承資料（編集者ヨハネが自分の神学を語る言葉、例えば序や最後の晩餐の説教や「私は〜である」言葉は入れない）、マタイとルカ特有の伝承資料、補助的にトマス福音書（語録）がイエスの言行として使用できる。福音書には他にもユダ、ヤコブ、ペテロ、ニコデモの福音書や「トマスによるイエスの幼児物語」などあり、日本語訳さえあるが、それらは歴史的にイエスに遡ることはできない。『マルコ』、Q資料はイエスの死後二〇年〜四〇年頃（〜AD七〇）まで遡りうるもので、ヨハネ福音書の成立は六〇年後の九〇年頃とされ、トマス福音書

は2世紀ころである。

福音書の本文批評は、やり尽くされた感があるが、編集者の視点を考慮する必要があるのは、ヨハネも共観福音書も同じである。

いっぽう、仏教では上座部パーリ語五部（経）のゴータマ・ブツダの言葉は、歴史的なゴータマに帰せられるわけではない。さらに大乘經典の「如是我聞、仏曰」の言葉が、ゴータマ・ブツダの伝承ではないことは、動かせない定説である。しかも、仏教では、經典の歴史的事実性は問題となつてこなかった。仏滅年代でさえ、南伝と北伝の約一〇〇年の違いが今なお解決を得ていないのは、インドという風土が歴史に重きを置かなかつたという面もあるが、仏教の救済の事柄そのものが、歴史とは関係がない自己自身の事だからである。しかし、イエスの言葉とゴータマの言葉を比較するには、まずは歴史的確実性という同じ土俵に立たねばならない。<sup>9)</sup>

ゴータマの言葉は、発せられた期間さえ八〇歳入滅であるから約五〇年の幅がある。また原始經典の成立

史も未だほとんど確立していない状況である。もつともいわゆる仏典結集伝承は、キリスト教の場合と同じく、ゴータマ・ブッダの直弟子による合誦という伝説であるが、実際とはほど遠い。それでも最初期（一期）經典はスッタニパータ四章、五章であり、ゴータマに遡る伝承であるというのが定説である。それに次ぐ古層經典は定説として相应部有偈篇<sup>11</sup>雜阿含偈誦（二期、スッタニパータ一・三章の一部と重複）があり、文学様式としては対話が主である。両者とも韻文が多いが、散文もかなりある。

現在はそれ以上の經典成立史の定説はない。それは南伝パーリ語と北伝漢語の二通りの原始仏教文献があつて、その両方をふまえて成立史を論ずることが難しく、どちらかに偏つた説になるからである。だが、仏教とキリスト教の比較作業のためは、經典成立史が必要である。<sup>12</sup>

実は漢語四阿含（アガマ）、パーリ語五ニカーヤは、かなり異なつたものである。例えばパーリ語の増支部（AN）は二一九八經あつて、漢訳の増一阿含（四七三經）

に並行するものは一五三經、雜阿含に並行するものは一二四經、中阿含に並行するものは八二經、その他で、まったく漢本阿含と対応していない經が一〇〇〇經以上ある。漢本雜阿含もなにも対応しない經が一七六經ある。また五百結集伝承の雜阿含の内容は大衆部系の『摩訶僧祇律』と上座部系の『四分律』、『五分律』、『十誦律』ではまったく異なる。大衆部のそれは、修行教学体系（根・力・覺・道 三期）であつてゴータマ・ブッダの伝承ではなく、上座部のそれは雜阿含偈誦（S N s）であり、古伝承である。

長部、中部など五ニカーヤの編集は前一五〇年（サンチー仏塔）頃であり、四阿含の編集はもつと後である。それらはほほ他の初期經典に遡ることはできても、ゴータマ・ブッダには遡ることのできない經典群である。したがつてゴータマ・ブッダの言葉資料としては以下のような二期までの文献である。

一期 スッタニパータ四章アッタカヴァアガ全部、五章パーラーヤナの序と結語を除く全て。

二期 雜阿含偈誦に並行する相应部（SN）有偈篇

(s)「それらに並行するスッタニパータ一章四、六、七、九、一〇、二章五、三章三、四、五、一〇の経」

雑阿含偈誦 || SN有偈篇 || 別訳一〜五、九〜一五卷

計一七九経、律蔵戒本(パーティモツカ、波羅提木叉)の一五二条である。それに補助として二期後期の長老偈(テラ・ガター)、三期の長老尼偈(テリー・ガター)があげられる。

ところで、福音書という様式はイエスの言葉だけではなく、誕生からその死までの行動、生き様を含む。それは、単純に考えれば律蔵・犍度、大品に含まれる十比丘の教団成立伝承(五期)をはじめとする仏伝の一部が対応するように見える。さらにその部分が律から抜き出されたマハーヴァツ(大事)(大衆部系説出世部)、紀元後一世紀以降の五部派の仏伝を集めた『仏本行集経』三〇卷、『過去現在因果経』四卷、『ラリタヴイストラ』(漢訳『方广大莊嚴経』<sup>1)</sup>、馬鳴のブツダ・チャリタ(漢訳『仏所行讚』AD2C)などがある。しかし、ほとんどの『仏伝』が依用するそのような後代の記述を福音書と同一に扱うことはできない。

律蔵大品の部分仏伝の資料と考えられるものは、以下のものなどである。

第一誦 1、菩提樹下の成道(十二因縁) c f

SNs 四・一・一〜三 || 雑阿一〇九四<sup>2)</sup>、

SNs 一・一・一〜二、SNp・三・二二(二期)

2、二商人の供養↓c f、雑阿五九〇 || 別訳

雑阿九・二四、商人に十二縁起(四期)

3、梵天勸請 || SNs 六・一・一 || 増一・一・

九・一(四期)

4、五比丘(雑阿三四) || SN 22・五九五

蘊皆空経、『五分律』一五、(四期)

『四分律』三三、Mv 一・六・一三(六期)

5、初転法輪 c f、SN 五六・二二・一一〜

一四 || 雑阿三七九〜三八一、c f、MN

二六聖求経(五期)

第二誦 耶舎の出家と三帰依具足戒、c f、中阿

含三三侍者経(六期) 魔からの解脱 雑阿

二四六 || SNs 四・三・四(四期)

今、六期までの経典で仏伝の部分といえるものを挙

げれば次のようになる。

スタッニパータ三…一出家(= Myu. II 『一九八頁以下、四分三一、有部破僧事四、七期)、Sup. 三・二つとめ勸むいと (Myu. II。一三三頁以下七期)、Sup. 三・六サビア(= 『仏本行集経』卷三十八、三十九 = Myu. マハーヴァツ(大事)三)、Sup. 三・一ナーラカ(= 『仏本行集経』卷三十八、七期)、また中阿含五 三羅摩経(= MN 二六聖求経五期)、中阿含三 梵志陀然経(= MN 一三三仏の降誕五期)、中阿含六 大天木奈林経(= AN 六期)、中阿含二 九柔軟経(= AN IX 一三、六期)、MN 一三三稀有未曾有経(= 中阿含三二、五期)。

これらの中にマタイ特殊資料とルカ特殊資料に含まれるような誕生や幼子への予言、悪魔の誘惑、宣教(説法)以前の生活が含まれる。その神話化過程には興味深い共通要素があり、仏教とキリスト教の比較の一部としては十分意味を持つがゴータマとイエスの資料にはなりたい。五期までの経典が補助的に使えよう。

## (二) 似た社会状況における人々との対話

次に比較を成り立たせる軸にはどのようなものがあ

るだろうか。一つには、イエスとゴータマの時代には歴史的社会的状況の類似性がある。

ヤスパースが枢軸時代と名付け、伊東俊太郎が精神革命期と名付けたように、この時代は、文明の発達した地中海世界、インド亜大陸、中国で政治的経済的社会的に、したがって精神的にもひとつの転換期を迎えていたといっていよいよ。地中海世界とインド世界は、前三二七年マケドニアのアレクサンダー大王の西インド侵入によって一つにつながったことに象徴されるように、大帝国の時代を迎えたのである。その時代は例えばエフェソスの廢墟の劇場、商店、交通路、公衆浴場、水洗便所、調理室などに見られるように現代まで続く都市文明が始まった時期である。そこには従来の村落共同体、小国家にはない苦しみが生じていた。

ユダヤが独立一国家であったのは初代サウルからソロモンまで三代に過ぎず、北イスラエルは七五二年にアッシリアに、南ユダは五八二年にバビロニアに滅ぼされ、爾来ずっと外国勢力の支配下にあった。わずかに紀元前一四二年・六三年マカベア王朝が独立を果た

したが、イエスの生きたパレスチナにおいてはシリア、ローマの支配下であり、イエスの死後、紀元後六六年にはついにユダヤ国家は滅亡するに至った。

一方、インドはガンジス川流域が紀元前一〇世紀には北西から侵入してきたアーリア人によって支配されることになった。ゴータマの頃は、十六国といわれる小国が分立していたが、その中でもコーサラ、マガダ、ワッジー、マツラー、ヴァンサ、アヴァンティ、クル、パンチャラなどが小国を併呑して大国となっていき、ゴータマの属したシャキャー族の国は、ゴータマの在世中にコーサラ国によって攻め落とされ滅亡したという。

社会状況を見てみると、イエスの当時は、日々のパンでさえ市場で売られており、利子をとって金を貸す者がおり、民衆は自営自給は少なく、小作や日雇い労働に従事する者も多くいた。また人頭税をはじめ、宗教的十分の一税、通行税その他、様々な税を、ローマとユダヤ当局からしぼりとられていた。

ゴータマの頃も、大国では都市が繁栄し、僧団の律

でその所持を禁止されるほど貨幣は流通していた。武力による戦乱で常に被害を被るのは農民や牧畜民である。社会階級はいわゆる四カーストのほかにも遊女、大商人（長者）などが生じていた。

しかし、都市化によって血族、地縁などの縛りから精神的な自立が可能になり「個」が確立しえた時代でもあった。大国の圧政という社会不安の中で、伝統的な宗教が力を失っていったことも両者に共通する。イエスの時代には、ユダヤ教の神殿儀礼をする祭司階級（サドカイ派）が支配勢力の一翼を担い、それに反発する革新的な宗教者ファリサイ派が民衆の指導的役割を果たしていた。しかし、世俗内宗教に飽き足りない人々が、メシアや裁きの日を待望してエッセネ派やヨハネ洗礼派のような禁欲的宗教グループを形成していた。

ゴータマの時代も、支配階級であるバラモンに飽き足りない人々が、遊行修行者（沙門、シユラマナ）となっていた。それは四住期というバラモン教の伝統によっても、家庭の義務を終えた人々に精神的な探求をなしうる余地が社会的に存在していたからであ

る。

ユーラシアとヨーロッパを包含するような枢軸時代の状況は、ある意味で交通とインターネットが発達して世界が一つになり、その中で強大国が弱小国を政治的経済的に支配して、不安が世界を覆い、仏教、キリスト教をはじめとする伝統宗教勢力が力を失っている現代と共通する。枢軸時代に始まったその都市文明化の潮流が末期を迎えていると見ることもできよう。

この武力を背景にした権力と貨幣による経済力が、世界を動かし始めたその同じような時期にゴータマとイエスは生きて、宗教的活動をしたのである。この共通点が比較の軸になる。

具体的には

- (一) 家族にいかに対したか。
- (二) 他の宗教者にいかに対したか。
- (三) 国家や支配者に対して、どのような立場であったか、
- (四) また抑圧され差別される人々に対していかに振る舞ったか、

(五) 貨幣経済の力にどのように対したか、

(六) 弟子たちに対してどのように振る舞ったか、

(七) 自ら生き、弟子に示した救われた者(解脱者)の生き方とは何か、

などということが、似た社会状況の中で比較されるだろう。

これらは主として相手がある問題であるから、対話という文学様式がふさわしい。イエスの場合は主にマルコ福音書やヨハネ福音書などに、ゴータマの場合は古層である相應部有偈篇(雜阿含偈誦)を中心に対話という様式がある。そこでは、弟子、救いを求める人々、論敵、身内や、神話化もすでに進んで悪魔や天子に仮託された者など共通の対話者があり、それらを軸に比較することが可能である。

ところが、相手との状況による対話ではなく、そもそもこのような社会状況の中で彼らは救いとして何を語ったか、という肝心の教えの主題となると、共通軸が存在しないのである。

イエスは「神の国は近づいた」(『マルコ』一：一四)『マ

タイ』四・一七)、と語り宣教を始めた。その来るべき「神の国」は喩えて語られ、その見える形は、治癒などの多くの奇跡であった。

ゴータマは「わたしは、もはや苦行から解放された。わたしが、あの(ためにならぬ苦行)から解放されたのは、善いことだ。私が安住し、心を落ち着けて、さとりを達成したのは、善いことだ」と言ったと、「さとりを開かれたばかりのときであった」という状況句と共に伝えられる(SN IV・一・一)。またゴータマは「ベナレスの(仙人の集まるところ・鹿の園)にとどまっておられた」という状況句で、「私は完き注意により、完き努力により、無上の解脱を体得し、無上の解脱を証得した。修行者たちよ。そなたらも完き努力により、無上の解脱を体得せよ、無上の解脱を証得せよ」(SN IV・一・四)と語った。その修行の仕方、解脱に至る思惟の内実が以後さまざまに説かれていく。

イエスの来るべき「神の国」に対応する概念、奇跡行為はゴータマにはない。ゴータマの「涅槃」、「無上の解脱」、行のあり方に対応するものはイエスにはない。

またキリスト教が旧約聖書も聖典としたように、唯一絶対の神を抜きにイエスの言葉はないし、理解できない。一方、後の経典がインドの神々を仏教守護眷属として導入しはするが、ゴータマにおいては、バラモン教のブラフマンや否定神学であらわされる絶対者も、ヒンドゥー教にあるような創造神も説かれない。さらにゴータマやその後継者への帰依も説かれず、「自己に依れ」と示される<sup>16)</sup>。

また、多くの人が指摘しているように、両者の死はイエスのもつとも無惨な十字架の処刑と、ゴータマの天寿を全うしたもつとも穏やかな死である寂滅として、まったく対照的である。しかも自ら言葉として残しえない、その十字架、寂滅こそがイエスとゴータマの宗教の核心なのである。それらを欠落させてはキリスト教、仏教は成り立たないから、いくら色々な人々との対話を比較しても、イエスとゴータマの根本的な比較には遠い。その違いはキリスト(メシア)、ブッダ(覚者)という呼称の思想的文脈からして、まったく異なっていることから明らかである。

両者にとってその教えの核心となるものが、双方に見いだされないのである。

それがキリスト教と仏教に見いだされないというのではない。「神の国」に対応する「浄土」があり、「さとりに近い神秘体験や、坐禅と対応しうる瞑想などに両者の共通点を見いだすことはでき、比較の軸となりうる。ゴータマとイエスからは対応の軸が見いだされない場合、次のようなアプローチが可能であろう。

一つは「人間としての問い」という中立的な対比軸を立てること。これは例えば『仏教とキリスト教の比較研究』<sup>⑦</sup>で、増谷文雄氏が取った立場で、

- 一「わたしはいかなる人間であるか」という人間論、
- 二「わたしは何をねがうべきであるか」という幸福論、
- 三「わたしはなにに依ることができるか」という信仰論、

四「わたしはなにを為すべきか」という実践論<sup>⑧</sup>が軸となっている。しかし、その軸においていかに仏教とキリスト教が一見似ているかを見えても、じつさいは異なることが明らかにされている。その中でキリスト

教の信仰と浄土教の信仰が「相並行するものであること」が特異な点である。この比較では、哲学書や浄土系経論なども多く引かれるが、基本的に新約聖書とパーリ語原始仏典（五ニカーヤと律）である。そうであれば、違いが闡明されるのも妥当であろう。

もう一つは、仏教にもキリスト教にも接点をもつ軸を構想するという仕方であり、八木誠一氏の『仏教とキリスト教の接点』<sup>⑨</sup>はそのような典型である。その書のはじめに「キリスト教にも仏教にも人格を統合する超越者のはたらきに自覚的に参与するところに成り立つというのが本書の予感するところである」と述べられる。だが、それは両教を検討した結果、帰納されるものではなく、ただちに「キリスト教と仏教が同じ根拠に立っている」という結論を方向として指示するものである（同頁）と結論が示されている。したがってその論述は、キリスト教と仏教が同じ根拠に立っているということ、キリスト教文献、仏教文献から明らかにするのではなく、じつさいは「統合論」の構築とそれに対する仏教、キリスト教の接点の指摘であるとい

える。ここではキリスト教では新約聖書にほぼ限定され、いっぽう仏教は原始仏典ではなく、世親の『アビダルマ・コーシャ（阿毘達磨俱舍論）』、『成業論』、唯識思想、『法華経』の思想、天台智顛の思想、華嚴思想などが解釈されている。

これらは比較対象の文献の問題もあるが、このようなアプローチ自体が妥当だとは思われない。宗教は「聖典」への虚心な聴聞によって、なにほどこその内実が明らかにされてくるものであって、人間の側からの問いや宗教哲学的関心に対応するものではないと思われるからである。

では、ゴータマとイエスの比較はどのようになされるべきだろうか。上來みてきたように、キリスト教と仏教はまったく異質であることを、もっとも雄弁に立証するものこそゴータマとイエスの言葉であろう。それこそが比較作業としてなされるべきことである。

今、ゴータマとイエスの根本的違いとして指摘したことをよく考えれば、実はゴータマとイエスの教えの違いではなく、かれらが属していた宗教類型の違いで

あることに気づく。

イエスの場合、次のような根本概念はユダヤ教のみならずイスラームにも共通するものである。

- (一) 究極的実在 唯一の神
- (二) 隣人愛と信仰の重視
- (三) 世俗内共同体（選民、教会、ウンマ）
- (四) 終末時のメシア（救い主）による神の国の到来
- (五) 死者の復活と審判による天国（神の国）での永遠の生

ゴータマの場合、次のような根本概念はバラモン教のみならずジャイナ教、ヒンドゥー教、さらには老荘思想にも通底する。

- (一) 究極的実在の言語超越性（ブラフマン、空、道）  
アドヴァイタ（不二不異）
- (二) 修行（とりわけ瞑想）と戒律の重視
- (三) 脱世俗共同体
- (四) 行における知的省察による今（ここ）での浄福（安穩）（涅槃 梵住 三昧 恍惚）
- (五) 浄福を現に実現する（覚者、聖人となる）こと

による生死輪廻の超克

これらは関係性（愛）の宗教と自覚の宗教、あるいは救いとさとりという異質な二つの宗教類型である<sup>23</sup>。この二類型は洋の東西、人種、歴史によって規定されるものではない。

イエスと同時代にも世俗を離れた共同体で清めの行に努めたエッセネ派があり、知ることににより、この世から解脱する哲学的一派やグノーシス宗教があった。修道院では聖化の修行が現代でも続けられている。

ゴータマにやや遅れる時代にヒンドゥー教には創造神ヴィシヌヌ神への信（バクテイ）によって、死後に梵界に生まれる救済が起こり、一種の救済者であるクリシユナや、劫末に人々を救済するカールキーもいる。仏教にも阿弥陀仏や弥勒仏、観音菩薩など救済者と呼べるものがある。

このような二種の宗教類型は、それがキリスト教や仏教であるのではなく、いわんやそれらをゴータマとイエスが説いたというでもない。むしろそのような類型として捉えられる宗教環境において、かれらは何

を説いたのか、ということがゴータマの言葉とイエスの言葉によって明らかにされるべき事柄である。

したがってゴータマとイエスの言葉の比較は二種の方法によることになる。一つは似たような社会的状況の中で、人々にどのように語り、振る舞ったかという対比である。もうひとつは、互いに周囲の宗教に対して、どのようにその差異を語ったか、その核心は何かという根本問題をそれぞれに明らかにすることである。それはイエスの言葉、ゴータマの言葉の解釈という作業になる。

#### 註

- ① シツダツタが名であり、ゴータマは姓に当たるが、ゴータマ・ブツダと言いつつ慣らわされている。
- ② パウロは「サウル、サウル、何故、わたしを迫害するのか」（使徒言行録九・四）という幻におけるイエスの言葉によって回心した、とされる。
- ③ マタイ、ルカにも並行する言葉があり、それらはマルコ福音書を下敷きに行っていると考えられるの

で、マルコ、マタイ、ルカの三福音書を共観福音書という。その「共観」である。

④ 法集論、分別論、界説論、人施設論、双論、発趣論、論事。

⑤ それに第一、第二ペテロ書簡、ペブライ書、第三ヨハネ、ヤコブ書簡を含めたもの。

⑥ 『ブツダのことは スッタニパータ』中村元 岩波文庫、一九八四年。

⑦ ローマ人に宛てた書簡、コリント人、I、II、ガラテヤ、テサロニケI、ピレモン宛。

⑧ 『マタイ』と『ルカ』の共通部分から演繹されるもの、Quelle(資料)からQと呼ばれる。

⑨ このことの困難さのゆえにイエス・キリストとゴータマ・ブツダを比較した学問的な研究はほとんど存在しない。「ブツダとイエス・キリスト」Richard H. Drummond(八木誠一・田中友敏、法蔵館、二〇〇七年)は、ブツダについて、文献から語る事が非常に少なく、またその仏教理解には大きな疑問がある。学問的研究とはいいい難いものに次

のようなものがある。

『釈迦とイエス』古川確悟、一九五〇年、敬文堂。

『イエスは釈迦であるー仏教とキリスト教』堀堅士レグルス文庫(創価学会)、一九七三年。

『釈迦とイエス』ひろさちや、祥伝社、一九八八年。英雄伝説『イエスと釈迦』三田誠広、講談社一九八九年。

⑩ その一部を「花園大学文学部研究紀要」32号、二〇〇〇年に発表。

⑪ 並行漢訳『方广大莊嚴經』例えば H. Beck, *Buddhism*, 一九二八年。

⑫ SNはサンユッタ・ニカーヤ(相应部)はサガータ・ヴァツガ(有偈篇)の略。

⑬ 大正藏經の雜阿含につけられた経番号。

⑭ その他 Sup. 一・五チユンダ、Sup. (長阿含遊行經三・一八 パリニッパパーナ經のサンスクリット、チベツト、有部雜事三七、六期) など長阿含二とD N一六。

⑮ インダス文明も高度の都市文明であったことが発

掘により分かつている。

- ⑬ 「法(ダンマ)に依れ」とは説かれるが、ダンマとは何か、という問題はゴータマの言葉によって明らかとされるものであろう。

- ⑭ 初版、一九五六年、青山書院、新版、筑摩書房、一九六八年。

- ⑮ 同上書、序文 四・六頁。

- ⑯ 一九七五年、法蔵館。

- ⑰ 同上書、一二頁。

- ⑱ この問いによる比較が必ずしも十分なものではないことは、増谷氏も気づいて「それらの問いを通して仏教およびキリスト教を観察し検討するということとは、とりもなおさず、この二つの宗教をまったく人間的立場から試みるということにほかならないのであって、あるいは、はるかに、人間を超越した高き彼方のなにかを取り落してはいないかと憂えざるをえない」(五頁)と述べている。
- ⑲ J・ヒツクがコペルニクスの転回だという神中心主義はキリスト教・イスラム教・ユダヤ教とヒン

ドゥー教の中でも一神教の要素が強いヴィシユヌ派と、完全な一神教であるシーク教に言及しているだけなので、X型宗教の共通特性を言っているにすぎない面がある。逆に、H・キユンクは宗教の類型として一神教、仏教、道教と三類型に分けているが、後の二者の共通項に気づいていない。

# レスポンス

長町裕司

松岡先生の大変興味深い研究御発表に接して、学ばせていただいたことが多くありました。仏教とキリスト教それぞれの聖典概念の大きな相違を開明することを始めとし、仏教における原始經典成立史と新約聖書の諸福音書（イエスの言葉とされる語録が多く含まれる）の伝承史・編集史を一定の同じ準拠枠の下に問題化することの決定的難点の御指摘も、双方の二大世界宗教の創設者たちが語ったと伝承される言葉の比較を試みることに至難さへとわたしを導いて下さいました。その上で、（その語り出された言葉を巡って）ゴータマとイエスのむしろ対照（コントラスト）化がどのような比較軸を通して真正になされるのかを提起して下さいます。その比較のための軸とは、一つには、両創始者が身を置いていた「類似せる社会的状況」にお

ける人々との関わりであり、他の一つは両者がその背景からして有する宗教的環境からの「相違せる宗教類型」の峻別である、と開陳されてゆきます。

以下では、先生の御発表を拝聴してわたしが考えさせられました幾つかの点を記させていただきますと思います。

（一）ヘブライ的（即ち、キリスト教が「イエスの言葉」として伝承史の過程に取り入れる際にも前提ともなる）「言葉理解」は、神の自己表明の根源性において（現実そのものと成るものとしての言葉（*word*））が考えられており、神と集合的な人間共同体の間に開かれた（救いの歴史）の関係性の中で現実化・実現していく行為（遂行）性格を有している。そしてこのような脈絡の中で、キリスト教の伝統で「イエスの言葉」は現実の力動的な成就が凌駕不可能な終末論的次元を開示し結晶化せしめるものとして卓越した意味機能を獲得し、言葉理解の神学的敷衍化をもたらした。

これに対して、仏教の伝承過程で「ゴータマの言葉」とされるものが固有かつ決定的意義を有する「言葉理

解」の進展もしくは変位を帰結していないという見地  
自体、むしろ仏教における〈行（修行）〉と〈言葉〉と  
の固有で独自な関係を見出すための端緒となり得ると  
考えるが、如何がであろうか？

(二) 〈ゴードマの語った言葉〉と〈イエスの語った  
言葉〉とは、その歴史的・精神的境涯が布置する脈  
絡からの志向内実において根本的な分岐点が出現する  
とも言える。

ドイツの現象学哲学の重鎮クラウス・ヘルト氏  
(Klaus Held, 一九三六-) が或る論稿で指摘しておら  
れたのであるが、キリスト教における〈新たな存在現  
実への創造 creatio のパトス〉に対して、仏教の精神  
性においては〈無への解脱のパトス〉が支配的である  
と西洋の哲学的見地においては理解されている(『エ  
ートスとキリスト教的な神の経験』、斉藤 渉 訳、『理  
想』六六七号、特集〈現象学の新たな展開〉、理想社、  
二〇〇一年七月、三二一・四八頁)。こういった思想上の  
根本的な志向内実の相違を方向づける原点としても、  
二つの二大世界宗教の創始者の語った言葉は比較され

てもよいのではないかと思われる。

(三) 確かに、その背景を成す宗教的環境から「相  
異なる宗教類型」が出現すると考えられて然るべきで  
あるう。ゴードマーが出自とするインドの宗教事情と  
イエスが背景とするユダヤ教の歴史的展開の様相とは  
隔絶したものである。他方、(David Strauss) によつて提  
起され、Karl Jaspers がその『歴史の起源と目標』にお  
いて活用した) 枢軸時代 (Achsenzeit) という世界史の  
軸となる同時期的な精神的覚醒の並行現象を仏教とキ  
リスト教に当てはめるのは疑問である。紀元前5世紀  
を前後して、インドでのゴードマの修行と悟りの開闢、  
シナでの孔子及び孟子の活動、古代ギリシヤでのソク  
ラテス・プラトンに端を発するフィロソフィアの運動  
等との並行現象にあるのは、イスラエル・ユダヤにお  
ける大預言者と呼ばれるイザヤ・エレミヤ・エゼキエ  
ルの預言活動であり、これらの預言者の言葉とイエス  
が語った言葉の連関は再び全く別の準拠枠から問われ  
ねばならないと考える。

## 討議 V

司会 長町裕司

八木誠せっかくだから二、三点、ちよつと気が付いたことを。おっしゃるのは全くその通りですね。全体としてはそうなんだけど、気になるのはゴータマもイエスも宗教の創始者だ、というのは違うんですよ。ゴータマは確かに仏教の創始者だけど、イエスはキリスト教の創始者ではないんです。キリスト教を始めたのは、十字架上で殺されて蘇ったイエスこそキリストだといひ出したエルサレム教団の弟子たちでしてね。イエスがキリストだというのがキリスト教だから、キリスト教はイエスの弟子であつてイエスじゃない、それが一点と。それと関係することですが、イエスの言葉抜きでキリスト教はありえないと書いてありますが、これはそんなこと

はないんです。たとえば、パウロはイエスの言葉に全然触れていない、何に触れているかと言うと死んで蘇ったというそれだけだから、すべてそこから言っているのですよね。だから、ブルトマンがイエスのキリスト教に対する意味はイエスが存在して死んだというそれだけの話だと言いましたが、復活したというのは弟子たちが言ったのですからね。だからキリスト教と言うのはだいたいイエスの言葉抜きで成り立っているわけで、しかしそれだけではやはり駄目だから、あとでくつついてくるのですけれどもね。たとえばヨハネ福音書はイエスの言行録という体裁をとっていますけれども、ヨハネ福音書のイエスの言葉というのは実際イエスの言葉ではないというのが通説ですし、僕も実際そう思います。だから仏教は、もちろんここにお書きになっているようにブツダの、ブツダは一人の覚者ということですから、ブツダの言葉なしにも成り立つんですが、キリスト教も実はそうなん

です、その点が一つ気になるのですね。それから、「キリスト教では言葉は真理を伝達しうる」、これはご自分でもちよつと違うかもしれないという表現をなさっていましたけれども、やはりキリスト教と新約聖書とイエスを区別しないといけないので、キリスト教の方は言葉というのは語りかけで、言葉そのものを受け取ることとは本当は真理を伝達することではないんですけど、確かにそういう形になっちゃっているのですね、おっしゃるように。そういうところがあるので、そこは僕が非常に不当な点だと思っっているのです。やはりキリスト教でも言葉と真理の関係は、つまりイエスやパウロとは違うので、こういう風におっしゃりたい気持ちには分かりませんが、「救済といった方が良いかもしれない」とおっしゃっていた、そっちの方が当たっていると思いますよ。

松岡

おっしゃられたことは、すべて良くわかります。

特に実際にキリスト教は使徒信条とかニケア信条というものを作って、そこではイエスがどう生きたのかということが欠落して、処女から生まれてポンテオ・ピラトのもとで十字架につけられてとパッと飛ぶわけで、それを信じていることがだいたい洗礼を受けるときに必要なことだと思いますね。そういう意味では、キリスト教はイエスがどう生きたかということ抜きにしてありえなし、そういうものとして歴史的に発展してきた要素もある。でも、まあ、新約聖書はこう決められてきたから、ただおっしゃることは非常に良くわかります。ですから、パウロとは全然違うイエスというものを、私は大きく仏教とキリスト教の比較ということでやっておりますので、その中で従来のキリスト教とどうイエスが違うのか、また歴史的にどうずっと間違えてきたのかということを見たいと思います。だいたいイエスは「誰も地上の父を父と言わない」と言いますが、カトリックはパパと言いますし、

「教師と呼ばれてはならない」と言われるけれども、わたしは日本基督教団ですから私は「教師」と呼ばれるのですね。何も聞いてないんですよ、イエスの言葉を。おっしゃられることはわかります。ただ一応キリスト教と仏教ということとでそういう言い方をしました。それからブツダがたくさんいるように、キリスト教も同じようだおっしゃるのは、それはどうかと思います。私にとってイエスの言葉というのはイエスの言葉に対する応答こそが、イエスの言葉を聞いてそれに主体的に応答することが、信仰だと思えますのでね。そこがキリスト教理解とどうか、言ってみればキリスト教理解の違いだと思うのですけれどもね。わたしは一応そのような立場なので、私にとってイエスの言葉は非常に重いと思います。

**八木誠** つまり、歴史のイエスの言葉なのか、福音書のイエスの言葉なのか、とくにヨハネのイエス

の言葉なのか、これを区別するともっとはつきりします。

**松岡**

そのような意味では、歴史のイエスの言葉というのはほとんど明らかにされないもので、わずかにアラム語に遡るほんの断片くらいしかないものですから。

**八木誠**

それほどでもないでしょう。

**松岡**

それでも伝聞でしかないもので、それをできるだけ精査してそれに依ろうと。そういう意味では歴史的なイエスの言葉であって、私はそれとヨハネ福音書の思想というのは違うと思いますから。その違う思想がどういう形で継承されて、どういう風にキリスト教の中で役割を果たして来たかということを一方で明らかにしてゆきたいと思っております。

**田中**

長町先生のコメントに対するお返事をお聞きしたいと思いますので、時間の関係で一点だけ。十字架の死とゴータマの死と、死によって教祖

の肉声を聞くことができなくなりましたけれども、それぞれ弟子たちが死後にその言葉をたとえば福音書という形で、あるいはゴータマの場合には口承によって長く伝えますね。ゴータマの言葉を暗唱して次の世代に伝えていったそういう時期があると思います。二人の死の後に言葉が生まれたということについてどのようにお考えになりますでしょうか。その二つの死の意味を長町先生は根源的なるものへの還滅と、ハイドガー的な表現をだいぶ使われましたけれども、やはり根源的なるものに還って言葉が出てくる側面があると思います、その点についてお聞かせいただきたいと思います。

## 松岡

言葉ということで申しますと、ヘブライでも、あるいはギリシャのロゴスもそうなんですけれども、言葉そのものを重視するということがあり、ただ行いということもありまして、キリスト教の場合はあくまでも行いと言えば関係性の

中での行いであり、あるいは歴史的に言えば歴史の中で実現してゆくような社会的なものであって、そのことと仏教の修行で言う行いというのは全く個人のことですからそれは違うのではないかと思います。それから田中先生がおっしゃったように、二人の死によって大きな運動がおこり、それが伝承されてゆくような運動になったということは確かにその通りだと思いますけれども、その衝撃は違うと思うのですね。わたしにとってあくまでイエスは刑死された、処刑された刑死として捉えておりますから、殺された人です。一番むごたらしい死を死んだそういう男というふうにつけておりますので、そこから言葉が出てきたということも、パウロに象徴されるようなのが最初の言葉でしたから、その最初の言葉がパウロの言葉であり、それからイエスの思い出として福音書に連なるような伝承が集められたということがあると思うのですね。それに対してブツタというのは、本来は「一

切は無常」と弟子達はブツダから教わったので  
すから、ただ冷静であるべきなのに非常に嘆き  
悲しんだと伝えられているわけで、その出来事  
というのは非常に大きかったと思います。ブツ  
ダがないという思いが大乗仏教に繋がるよう  
なストゥーパの信仰を生み、仏塔ですねお墓で  
すけどね。そういう流れになっていくというこ  
ともあると思いますけれども、長町先生がおつ  
しゃられたような同じところに還ってゆくとい  
うふうには私にはなかなか思えないのですね。  
というのは、ブツタというのは肉体的に亡くな  
られただけであって、いつもいつも死を超えて  
おられたと思いますから、いついつもそうであ  
った、そのことが肉体においてもそうであつた  
と理解しているものですから。弟子たちにとつ  
て、つまりブツダがないということが人々に  
対しては大きな衝撃であつたということはあつ  
たとしても、ちよつと死んでどこかに還つたとい  
うことではないと思いますから。パリニツパ

### 長町

ーナ、大涅槃と言いますが、ブツダの教  
えそのものが生まれる前に還るようなそういう  
ものですから、そういう意味で普通にわたした  
ちが五感を使っているその活動というの  
を止めるところが涅槃なものですから、常に死  
んでいたと言えれば常に死んでいたのではないか  
なと思っております。

### 松岡

人間の側から問いを立てるわけにはいかないか  
もしれませんが、やはり人間の死、その言葉を  
語られたお二人の生の貫徹、それがどこへ終局  
化し、究極決定性を得るかという問題として捉  
えることはできないのですか。

### 長町

だから違いとして捉える、それは大きなことだ  
と思います、そのところは。  
僕の感じでは、現われたものとしては様相は違  
うのですが。お時間ですが、なにかコメントと  
かございますか。それでは先生、大変刺激的で  
ずっと心に残るご発表ありがとうございました。